

PORTFOLIO II

Photographic Society of Zone System

2017

ゾーンシステム研究会 ポートフォリオ発行に寄せて

ネガ情報をプリント上に如何に再現するか、
これは写真家にとって永遠の課題である。
そしてハーターとドリフィールドは 19 世紀末、
写真感光材料の特性曲線の理論を発表し、
感光材料は現像でコントロールするのではなく、
露光量でコントロールすることが重要であると述べた。
しかし、当時はまだ電気露出計は無く、
それは 1932 年まで待たなければならなかった。
後にアンセル・アダムスはこの電気露出計を使って、
そのストップと印面のゾーンを等しいとするゾーンシステムの理論を 1949 年に発表し、
その発展と啓蒙に尽力した功績を忘れてはならない。

このポートフォリオ制作に携わったメンバーはじめ、
写真(銀塩プリント)愛好家の多くは、
初めてダークルームで露光済みの印画紙を現像バット中に滑り込ませた時、
一呼吸おいてセーフライトのうす暗く神秘的な佇まいの中で現れる画像に感動し、
興奮した事は、表現はあまり良くないが、
写真のドツボに落とされるきっかけになったと言っても良いのではないか。
この素晴らしい緊張感をもった体験をデジタル世代の多くの人たちにも、
これが写真だという感動を是非とも味わって欲しい。

このような時、
このポートフォリオ発行の意義と真の写真文化継承に期する責務は重大である。
今、我々の使っている銀塩フィルムや印画紙は残念ながら工業生産でないと作れないと
いうのが最大の欠点である。
従ってこの伝統を守る為には我々自身が使い続けることが一番重要である。
また、写真家の多くが体力、視力の衰えを理由に 75 歳前後で暗室から離れてしまう人が
多いのは残念である。
小生もこれを考えると残された時間はそう多くない。
メンバーの皆さんの情熱に負けないように頑張りたいと思うと同時に、
銀塩プリントに拘る同志にエールを送りたい。

写真家 原 直久

ゾーンシステム研究会 「ポートフォリオⅡ」

撮影とはなんともどかしい行為か、と思うときがある。撮影日程を決め場所を特定し、カメラ、レンズ、フィルムを準備し、天気のことまで勘案しなくてはならない。現場でのロケーションやシャッターを切る緊張に満ちた瞬間、あるいは暗室作業にいたるまで、被写体と撮影者の間には地図や移動手段、撮影機材や薬品など多くのものが介在する。

こうしたすべてを自らの技量のなかに保つことが写真家には課せられている。

現在写真は電子テクノロジーによる画像操作へと大きく変化し、情報として扱われることが増えてきた。従来使われてきた写真という言葉で呼ぶ必要もなくなってきているように思われてならない。写真はその時々々の技術に沿って発展し、表現の幅を広げてきた。しかし、昨今の変化は私たちが扱うフィルムや印画紙という大事な素材にまで大きな影響を与え、銀塩写真から離れていく多くの友人写真家を見てきたことは残念なことだ。テクノロジーの発展が人々を想像力豊かなプロセスから遠ざけてしまうのではと気になっている。

一方で、銀塩写真を始めるひとたちや再び戻る人たちも少しずつ増えており、これはうれしいことだ。

ゾーンシステム研究会は20年余りにわたってモノクローム銀塩写真を探求してきた。研究会の目的は、ブローニーフィルムや4×5、8×10インチフィルムを使い写真制作することで、その特長を十分引き出すためアメリカの写真家アンセル・アダムスの考案したゾーンシステムを学び、活用してきた。その結果として私たちの展覧会に足をはこび、活動に関心をしめしてくれる方も増えてきた。銀塩写真に拘る理由を聞かれることもあるが、逆さまに写るピントグラスを眺め、フィルムをカメラに装填し、撮影後に現像、プリントするその全てのプロセスは大変面白く、創造力を育む素晴らしいメディアであると考えている。

科学とアートのバランスで成り立つ銀塩による写真制作はそれほど難しいことではなく、誰にでもできることなのだ。この誰もができるということが重要で、とりたてて高価な機材もいらぬ。カメラは扱いやすく道具立てや感光材料はすでに長年研究され、大きな変更がないのも好ましいところだ。私たちが大型カメラを使い続けている理由もこのシンプルさにある。

私たちの最終作品はプリントにある。自然風景や人物を捉えた一枚のプリントを人が眺めるとき、既に記憶にある見慣れた色彩から徐々にモノトーンへ移行してゆく、この過程のなかから、あるがままでありながら現実とは違うもうひとつの世界、銀塩モノクローム固有の奥深い美しさが立ち現れてくる。

私たちがめざすプリントは単純な白と黒ではなく、様々な印画紙や現像液の組み合わせによって得られる純黒や冷黒を、セレン調色の処理により一段と美しく高めたものである。照明によっても微妙に変化する豊かな諧調は、ハイライトの白の美しさとあいまって、モノクロームプリント独特の魅力となる。

作品のテーマは、それぞれ会員個人にゆだねられている。多くの会員は自然風景にカメラをむけることを好んでいるが、簡単に撮れるものではない。イメージした風景はそこに行けばあるというのではなく、常に変化するそのドラマに感動することもあれば、被写体に振り回され何も撮れずに引き返すときもある。

写真家は現実の風景を単に記録するだけではなく、対象の各部がもつ確かな関連性を、ピントグラスを通して観察し、正確なカメラ操作によって画面を構成してゆくべきだと思っている。このことは人物撮影にも静物撮影にも言えることで、適切なレンズの選択、慎重なピント合わせ、トーンのバランスを調整するためのフィルターの使用も欠かせない。どのような光の状況の中でも一人一人の技量と感性、さらには美学的な判断が必要であり、撮影者が決定した光が現れたネガをもとに、制作の一連の流れのなかで様々な手を加えてプリント作品は完成する。

研究会は、被写体への深い感動によってそうしたプリントをできるだけ多くの人達に見て欲しいという気持ちと、作者としてできる限り長く記憶し、記録に残したいという思いをもってきた。長い時間をかけて一つのテーマに取り組み、仕上げた作品が短期間の展覧会で消え去ってしまうのは、それまでに費やしたエネルギーと情熱からいっても納得できない。

そのため私達は5年前に「ポートフォリオⅠ」として8×10インチサイズのプリントをまとめた作品集を制作した。それから5年が経ち、今回、新たに「ポートフォリオⅡ」として11×14インチにサイズアップしたものを作った。前回と同じようにプリントコレクションに熱心な美術館や大学、個人のコレクターに保存していただきたいと考えている。作者自身がコレクションすることはもちろんであるが、プリントはいかに美しい作品であっても、一枚の紙である。テーブルの上に置かれ他の資料が重なればやがて忘れられ、散逸してしまう。第三者に託しておく方が長く保存される可能性は高いと思っている。

今回の「ポートフォリオⅡ」がプリントの長期保存という観点にとどまらず、日本の多くの写真家達に自らの作品を大事にするきっかけをもたらし、ひいては長い歴史をもつ我国の銀塩写真文化が再び活発になるための一助となれば幸いである。

ゾーンシステム研究会代表 写真家 中島 秀雄

作品リスト

1. 卷雲 中島 秀雄
4x5 210mm TMAX400 F32 1/8sec selenium toner アメリカ カリフォルニア州
2. Lion's Tail (Agave attenuata) 臼井健司
6x6 80mm TMAX100 F11 1/8sec selenium toner 静岡県 伊東市 シャボテン公園
3. 奥大日岳 荒井 崇
4x5 150mm 320TXP F45 1/4sec selenium toner 富山県 立山室堂
4. 光と影 岡崎 克之
4x5 150mm 320TXP F16 1/30sec selenium toner 千葉県 美浜区
5. Olmeca Head 川北 弘
6x6 50mm TMAX100 F32 1/15sec selenium toner 静岡県
6. Métro Paris 越後 久雄
6x6 38mm TMAX400 F22 30sec selenium toner パリ メトロ 11 号線アール・ゼ・メチエ駅
7. そら豆 金子 正道
4x5 150mm TMAX400 F22 4sec selenium toner 千葉県
8. pomegranates 北野 龍一
4x5 180mm TMAX400 F45 2/3 4sec selenium toner 東京都 自宅
9. 樹霊 橘田 功
4x5 180mm TMAX400 F45 1/15sec selenium toner カリフォルニア ポイントロボス
10. Four pillars 小菅 秀一
4x5 90mm TMAX100 F45 1sec selenium toner 茨城県 つくば市
11. flood tide (上げ潮) 古谷津 純一
8x10 210mm 320TXP F32 1/3 1sec selenium toner 千葉県 銚子市
12. The city & the city 畑 文夫
8x10 300mm HP5 Plus F45 1/15sec selenium toner 東京都 渋谷
13. Efes (エフェス) 松本 ひさ子
6x6 80mm TMAX400 F22 1/60sec selenium toner トルコ
14. アーティチョーク 浜野 次郎
4x5 210mm 320TXP F45 1/2 30sec selenium toner 東京都 自宅
15. 夏の終わりに 長谷川 勇夫
4x5 150mm TMAX100 F32 2sec selenium toner 千葉県 自宅
16. 岳樺晩秋 皆川 賢
4x5 90mm TMAX400 F64 1/30sec selenium toner 長野県 カヤノ平

作者コメント

1. 中島 秀雄

■略歴

- 1968年 東京写真大学(現:東京工芸大学)卒業
- 1968～1977年 写真家・細江英公氏の助手となる
- 1975年～1995年 日本工学院専門学校芸術学部映像科・講師
- 1986年 アメリカ・バモント州“ゾーンVIワークショップ”に参加。ヨセミテ撮影。
- 1993年～2007年 ゾーンシステム・ワークショップ講師 (川崎市市民ミュージアム)
- 2004～2009年 京都造形芸術大学通信講座講師
- 2008～2013年 東京工芸大学芸術学部写真学科非常勤講師

■主な個展・グループ展

- 1992年 “ナチュラル・ランドスケープ” (PGI ギャラリー)
- 1996年 “River” (ギャラリー・オリブ)
- 2000年 “ストレンジ オブ ライト” (ギャラリー・オリブ)
- 2001年 “光りへの観照”&レクチャー (東京工芸大学)
- 2003年 “Ghost Town, Bodie” (アートブラニング青山)
- 2003年 “光りへのまなざし” & レクチャー (ポートレートギャラリー)
- 2004年 “Ghost Town, Bodie” & レクチャー (ギャラリー・イシス)
- 2008年 “中島秀雄・春日広隆二人展&レクチャー (ギャラリー円月)
- 2013年 2015年 “光りへのまなざし” (ギャラリー・コールピット)
- 2015年 “光への眼差し” (ギャラリー・ストークス)
- 2016年 “水力発電所は今” (ギャラリー・コールピット)
- 2016年 “Ghost Town Bodie” (ギャラリーE&M)
- 2017年 “静物写真(偶然と必然)” (ギャラリー・ストークス)
- 2017年 “四人展” (リコーイメージングスクエア銀座)
- 2017年 “書と写真のコラボレーション” (ギャラリー・ストークス)

■出版

- 1978年 “藤田昭子の原風景” 筑摩書房
- 1987年 “藤田昭子の火の光景” パルコ出版
- 1994年 “藤田昭子の陶” 京都書院
- 2004年 “ゾーンシステム・ハンドブック” 中島秀雄・田中益男共著 朝日ソノラマ

■レクチャー、ワークショップ

東京工芸大学芸術学部写真学科大学院、大阪芸術大学写真学科、Niyama Gallery、ギャラリー・ヒットオン、ギャラリー・コールピット、東京写真文化館、アトリエ・シャテーニュ、他多数

■プリントコレクション

東京工芸大学芸術学部写真学科、アトリエ・シャテーニュ、ギャラリー、個人多数

■「巻雲」

写真家の助手時代、日本で開かれた G.E.H.C.展に見たエドワード・ウェストンやアンセル・アダムスのストレートプリントに写真の美と強さを感じ、それが私の写真の基礎となった。(GEHC・ジョージ・イーストマン・ハウス・コレクション) 大型カメラを操り、時間をかけて世の中の美と不思議をたぐり寄せ、自らのイメージと不可分にかきなるときに作品になる。

巻雲は、カリフォルニア州に今も残るゴールドラッシュ時代の街ボーディを訪ねた帰りに、西の空に突然現れた。車を止めてカメラを取り出し、フィルターを使って二枚撮影したところで巻雲の形が消えてしまった。

2. 白井 健司

■略歴

- 1954年生れ
- 1985年 モノクロ写真を始める
- 2011年 中島秀雄 ゾーンシステムワークショップ受講 (ヒットオン)

■グループ展

- 2005年～2017年 Photon (芸文センター(茨城県水戸市)他)
- 2017年 ゼラチン・シルバー・ファインプリント (ギャラリー・ストークス(南青山))

■「Lion's Tail (Agave attenuata)」

多肉植物の美しい曲線とトーンに惹かれた。

3. 荒井 崇

■略歴

- 1960年 栃木県生まれ
- 1982年 新潟大学工学部精密工学科卒業 (在学中、新潟大学写真部所属) カメラメーカー入社。その後ビデオカメラ設計業務に携わる。
- 1994年 日本カメラ月例 B部(モノクロキャビネ部)年間 11位
- 1995年 フォトスカラベ (写真コレクター関連団体)入会
- 1995年～2001年 日本写真学園短期講座(佐藤健治教室)にて大判写真を学ぶ
- 1996年 ゾーンシステム研究会入会
- 1996年～2017年 ゾーンシステム研究会第1回～21回写真展、毎年出品
- 2001年4月 フォトステージ5-6月号:「写真をコレクションする楽しみ」記事掲載
- 2002年2月 フォトステージ3-4月号:「フォトスカラベ写真コレクション活動」記事掲載
- 2002年3月 フォトスカラベ写真コレクション展 2002(ギャラリー遊)を企画開催
- 2002年～2011年 日本写真作家協会(JPA)展出品
- 2002年10月 アサヒカメラ10月号:写真コレクター関連記事掲載 (フォトリズム欄)
- 2003年7月 写真同好早田会(元佐藤健治教室)写真展参加 (代官山フォトギャラリー)
- 2003年12月 フォトステージ1-2月号:個展「橋脚」関連記事掲載
- 2004年～ 自宅に「ギャラリー宙」設立 (その後写真コレクション展、写真作家個展等を企画展示)
- 2004年2月 アサヒカメラ3月号:自身の作品「橋脚」掲載(巻頭グラビア)
- 2004年2～4月 個展「橋脚」開催 (2月:gallery DAZZLE 3月:GALLERY Private 4月:ギャラリー宙)
- 2006年5～6月 個展「橋脚」開催(アートスペース瑠璃)

■「奥大日岳」

春の早朝晴天、立山室堂はすばらしい。幸運にも前日夜の雪で一面手つかずの新雪。撮影を終えるとまもなく雪が解けてこの風景は一変。雪のかがやきは鈍くなり人の足跡が一面を覆い尽くした。

4. 岡崎 克之

■略歴

- 1935年生まれ (北海道日高市)
- 1960年頃～1995年頃 不動産会社、検査会社、ゼネコン、他、会社役員 自家用車運転手勤務
- 2001年頃 中島秀雄ゾーンシステムワークショップ受講 川崎市市民ミュージアム 現在に至る (2022年逝去)

■受賞暦

- 研展入賞
 - 浦安市美術展写真部優秀賞(1995年～1996年)
 - 毎日新聞写真コンテスト奨励賞
- 他

■「光と影」

昔からの宇宙の成り立ちから何拾年に1度の天体ショーかと軽く思い、1時間前に4x5を担ぎ近くの公園で撮影しました。

■写真の理念ー木のシリーズ(写真展開催模索中)

浦安市在住中、犬の散歩の途中目に入って来た木が色々なものに絡む姿を目にして、自然の中で生命の“力”の強さと長い年月を懸けて生長する姿を垣間見て感動を覚えました。

5. 川北 弘

・高等学校講師, 予備校講師(化学)

■略歴

・1954年 茨城県生れ
・2010年 中島秀雄 ゾーンシステムワークショップ受講 (ヒットオン)

■個展・グループ展

・1988年3月 memorabilia 風の記憶(ギャラリー・ルデコ 渋谷)
・2002年2月 memorabilia Ver2 'la memoire du vent' (NHK すいどびあ 水戸)

■展覧会

・1988年~2017年 茨城県芸術祭写真展(県民文化センター 水戸)
・1991年~2005年 三軌会写真展(東京都美術館 上野)

■グループ展

・1994年~2012年 茨城ライカ倶楽部展 第1回~19回(水戸)
・2000年~2007年 SABADO 展 第1回~8回(渋谷・目黒)
・2004年~2016年 フォトン茨城写真展 第1回~12回(水戸)
・2010年~2016年 ゾーンシステム研究会展 第15~20回(新宿・目黒)

■雑誌掲載

・2002年 日本カメラ 3月号 口絵 7頁掲載「memorabilia 一生徒達と歩いた風の記憶」

■受賞歴

・1996年 茨城県芸術祭友賞受賞

■「Olmeca Head」

オルメカの戦士と思われる人物の巨人人頭像が淡い霧に包まれ、群生するサボテンの中にたたずむ。肉厚の唇とつぶらな瞳、その人頭像と多肉植物の織りなす不思議な空間。古代メキシコ・オルメカ文明の謎と、そこに潜む「Spirits of Nature」を感じた。2010年10月 伊豆サボテン公園にてハッセルブラッド CW(デイスタゴン 50mm)で撮影。

■写真についての姿勢

米国の写真家アンセル・アダムスらの提唱したゾーンシステムはモノクローム銀塩写真の最も美しい究極の写真技法であると考えている。研究会活動を通じてさらに研鑽し、より高度な写真表現、より美しいモノクロームプリントの制作に努めたい。現在は「Spirits of Nature」をテーマに生命感溢れる自然の表情を探し求め、大判カメラを用いて撮影している。2016年夏、米国西海岸の自然の森と調和する都市ポートランドに旅し、そこで日々を暮らす作家や職人たちの豊かで楽しげな手作りカルチャーに刺激された。それゆえ、撮影からフィルム現像、そしてフィニッシュのプリントまで、一つ一つの作業にこだわり、それらをじっくり楽しみたいと考えている。

6. 越後 久雄

■略歴

・1949年 宮城県仙台市生まれ
・2007年 中島秀雄ゾーンシステムワークショップ受講

■グループ展

・2016年 ゾーンシステム4人展(銀塩ファインプリント)
(ギャラリーストークス)

■「Métro Paris」

パリメトロ11号線、アール・ゼ・メチエ駅はホーム全体が銅板でおおわれ、天井には大きな動輪と歯車、壁には丸窓があり、まるで、ジュール・ベルヌの古典的 SF 冒険小説海底二万里のノーチラス号内部にいるかのような不思議な空間であった。

7. 金子 正道

■略歴

・1952年生まれ
・1975年 手賀沼(千葉県)の汚染を扱った写真展開催
・1977年 手賀沼の四季の写真展柏そごうデパート開催
・2009年 ゾーンシステムワークショップ参加
・翌年ゾーンシステム研究会入会

■「そら豆」

そら豆の形や肌の美しさをグレーの階調の中に閉じ込めました。

8. 北野 龍一

■略歴

・1939年生
・1963~2004年 会社勤務
・2001年 ゾーンシステム研究会入会

■「pomegranates」

作品「pomegranates」は、勿論「ざくろ」です。子供の頃、方々でよく見かけた柘榴の実は、熟すと大きく割れて、中から酸味の強い真っ赤な種が現れて、一寸凄みのようなものを感じる果実でした。最近では、そんな日本古来の柘榴を見かけることが少なくなり、代わって主にアメリカ産の、大きなそして割れない柘榴が店頭に並ぶようになりました。嘗て暮らしたことがあるイランでは、これと同じ種類の柘榴が(ペルシャ語でアナルルと言います。)沢山採れます。イラン人は柘榴の原産地はペルシャだと自慢し、秋になると柘榴を絞って、柘榴ジュース(アベ・アナルル)を売る露店が、町中に氾濫します。

私の「ざくろ」のイメージは、熟してカッと割れた、ちよつと殺気を感じるような和種の柘榴ですが、乾燥地帯で喉の乾きを癒す、甘くて優しい柘榴もまた、魅力的な果実です。

そんな和洋の柘榴のイメージを区別して、作品のタイトルを「pomegranates」としました。

9. 橋田 功

■略歴

・1939年生
・1960年 写真コンテスト初入選 小西六'60さくらフォトコンテスト
・1997年 国展初入選(以後2005年まで連続入選)
・2003年 ゾーンシステム研究会入会
・2005年 国画会写真部準会員 推挙
・2005年~2010年 日本写真作家協会(JPA)展出品
・2006年 個展「中欧の街から」橋田功写真展
【京セラ・コンタックスサロン東京】
・2009年 国画会写真部会員 推挙
・2009年 個展「樹霊 三宅島」橋田功写真展
【アイデムフォトギャラリー シリウス】
・現在 国画会写真部会員・日本写真協会会員・ゾーンシステム研究会会員

■「樹霊」

2005年6月 ゾーンシステム研究会のメンバーとカリフォルニア州のカーメルに撮影に出掛けた時の作品。ポイントロボスの崖の上に樹皮が朽ちた白骨化した大樹が異様な形で聳え立っていて霊感さえ感じた、崖から吹き上げる強風に仲間の応援を得て苦勞して撮影した。

10. 小菅 秀一

■略歴

・2006年 「ゾーンシステム研究会」入会。
・2017年7月 グループ展「ゼラチン・シルバー・ファインプリント」出品。

■「Four Pillars」

モチーフは、つくば市「研究学園駅前公園」のタイトル名通り4本の円柱。撮影以前からこの円柱を写真にしたいと考え、造形的に捉えたフォルムや最適な条件などを思い描いていた。

ある真冬日の早朝、天気は快晴で寒いうえに風も強かったが、撮影には条件が揃っていると判断し、撮影現場に向かった。まもなく公園に着いたが、休日の早朝だったため歩いている人は殆ど見かけず、思い通りの光景が目の前に広がっていた。

撮影は、円柱のフォルムを強調したいためモチーフにできる限り接近、撮影位置の確保とアオリ操作を行い画面を構成した。(アオリは、前枠約3cmのライズと円柱全てに焦点が合うようスイングで調整した。)

11. 古谷津 純一

■略歴

高校時代に写真部に在籍し、暗室を学ぶ。
フィルムフォーマットが 35mm から 6x6cm, 6x7cm と徐々に大きくなり、気がつくと 4x5in.まで拡大したが、フィルム現像でつまづき、ゾーンシステム研究会に入門する。以来黑白作品に魅せられて現在に至る。
8x10in.の大判を主軸に、「海」や「建築物」をライフワークとして作画している。
千葉県野田市在住。

■個展

- ・2014年 11月 「私風景／野田」(興風会館ギャラリー)
- ・2015年 「やまぼうし展」:時游空間 (やまぼうし)
- ・2015年 「オーストラリアの風」:時游空間 (やまぼうし)
- ・2015年 「personal selection」:時游空間 (やまぼうし)
- ・2018年 3月 「seascapes」(アイデムフォトギャラリー「シリウス」)

■2人展

- ・2012年 「John Studholm and Junichi Koyatsu - New Work」:Point Light Gallery, Sydney, Australia

■グループ展

- ・1999年 - 2017年 ゾーンシステム研究会作品展
- ・2012 - 2018年 東葛写真研究会作品展

12. 畑 文夫

■略歴

- ・1949年生まれ
- ・1972~2014年 カメラメーカーで光学デバイス、電子デバイス等の技術開発に従事
- ・1998年 中島秀雄 ゾーンシステムワークショップ受講 (川崎市市民ミュージアム)
- ・2003年 ジョン・セクストン THE EXPRESSIVE BLACK AND WHITE PRINT WORKSHOP受講 (カリフォルニア州カーメルバレー)
- ・2016年 フォトマスターEX(総合)

■個展・グループ展

- ・2008年 「マイ・ホーム・タウン 井の頭の四十年」(オガワカフェ(三鷹市))
- ・2009年 「Sometime Ago 69/79」(オガワカフェ)
- ・2010年 「Vanishing Point 消えたレール・消えた汽車」(オガワカフェ)
- ・2012年 「Urban Trees 都市の樹」(オガワカフェ)
- ・2017年 グループ展「ゼラチン・シルバー・ファインプリント」(ギャラリーストークス (南青山))

■「The city & the city」

同じ場所で生活していても、それを観る人によって都市はまったく違った存在になる。

途切れることなく新陳代謝している都市の、その一瞬の外観を定着したいと思った。

13. 松本 ひさ子

■略歴

第1回目のゾーン写真展(ギャラリーオーリーブ)を見て即、入会を決めました。毎年写真展の出品だけは続けています。(2020年逝去)

■個展

- ・2011年 2月 『シエムリアップの風』(ギャラリーコスモス)

■「Efes(エフェス)」

中学の頃より旅行は国内外を問わず大好きです。
エフェスはトルコの古代都市、遺跡の街です。
夕方の斜めの強い日差しの中、歩いていると足元近くの菊花石の様な黒光りする石に呼び止められたような気がしました。
「出会いには意味がある」という言葉は私の好奇心を支えてくれています。

14. 浜野 次郎

■ゼラチンシルバークラウドプリントであそぶ

ゾーンシステム研究会に入会させていただいたのは 7~8年前ではないかと思いますが、大判銀塩写真への興味はそれ以前からありました。ゼラチンシルバークラウドプリントに欠かせない「ゼラチン」は水と動物のタンパク質からつくられるそうですが、いくばくかの水分を含んでいるかのような、つやつやとした印刷紙の感触は私たちに癒しを与えてくれます。

研究会のみなさんは美しい自然風景を求め海へ、山へ、高原へと足を伸ばしますが、ものぐさな私の被写体は日常生活の範囲、というよりも8割は自宅のテーブルの上でつくった静物です。テーブルの上であっても物の配置の具合によっては自然風景とおなじような秩序が想起されるのではないかと愚考しているからです。

静物撮影で重要なのはこういう絵を撮りたいというイメージを先につくること。その上で材料を調達し、背景を考えねばなりません。場合によっては廃品をひろったり、市場をうろついたりすることから製作が始まります。撮影はほとんどの場合早朝におこないますが、被写体の質感をだすためのライティングや画面の構成を考えていると結構な時間がかかり、会社を遅刻しそうになります。はたからみれば全く意味不明な作業ですがなんのことはない、これは私の仕事である建築設計と極めて近い一種のかたちの実験であり遊戯なのです。

15. 長谷川 勇夫

■略歴

- ・1939年 5月 10日生まれ

16. 皆川 賢

■略歴

- ・1944年 茨城県水戸市に生まれる。
- ・1962年 写真に興味を持つ、兄のカメラで撮影しモノクロ現像を始める。
- ・2005年 日本大判写真家協会会員となり玉田勇氏の指導を受ける。
- ・2010年 中島秀雄氏のゾーン・システム(5~7月)ワークショップ受講
- ・2010年 9月 ゾーン・システム研究会会員となり現在に至る。

■「岳樺晩秋」

撮影地は長野県木島平村カヤノ平。印象深い晩秋の高原にて撮影。

■私の想い

私は自然が好きです。山岳、高原、溪谷、川、海の風景写真を好んで撮ります。人工物や人には余り興味を持たず、従って自然風景を主に撮影対象として。中でも自然の中で、神々や仏達や精霊などが遊び、目には全く見えないのだが何か気配の様なものを感じる場所。早朝の聖なる時間に一人身を置き、そして独り占めにするのが好きです。それが私にとって撮影も忘れるととても至福な刻なのです。私の望む写真はこのような目に見えぬ気配をシャッターで切りとる事が出来たなら、例えば暗く重い写真と評され様と満足です。

身体の衰えを感じる昨今、残された時間はそう多くは無い事を観念。されど写真創造には大変膨大なエネルギーを費やすのも事実です。これから先、あと何枚。自分にとって気に入った作品が出来るか。残せるかですね。

今はもう、精進と更なる研鑽に努めて好きな写真の道を永く楽しみたい。

発行年: 2017年
発行部数: 限定 24部
発行者: 中島 秀雄
事務局: 畑 文夫
編集: 荒井 崇

参考頒布価格 18万円